

被災者・支援者 災害振り返り 市内で400人研修

備えの重要性を訴える原田一世さん

11月3日、鹿児島市のカクイックス交流センター



大規模災害時の自助・共助を考え、防災意識を高める研修会が3日、鹿児島市のカクイックス交流センター（かごしま県民交流センター）であった。支援者と被災者がそれぞれの視点で災害を振り返った。

自主防災組織のリーダーや行政関係者ら約400人が参加。能登半島地震からの復興支援活動に従事するフードバンクかごしま（鹿児島市）の原田一世代表理事は、現地に民間の補給拠点を設け、炊き出し団体などに提供していることを報告した。

「大規模災害では1年先を見据えて支援する必要がある」として日頃の備えの重要性を訴えた。

2018年7月の西日本豪雨で岡山県倉敷市真備町の自宅と実家が全壊した金藤純子さんは、災害を契機に防災の啓蒙活動を行う会社を立ち上げた。「被災するまでハザードマップを見たことがなかった」と話し、身の回りの環境や歴史を知ることが備えにつながると呼びかけた。研修会は県、市、一般財団法人消防防災科学センターが主催した。（上岡毅）